

ちほの おしゃべりタイム



バナナが教えてくれたSDGs



オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師

とおる ちほ
透 千保

東海地方の各放送局(岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メーテレなど)で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人財育成に取り組んでいる。

この始まりは、ホテルの期間限定スイーツを食べたことがきっかけでした。モンブランとタルトに使われていたバナナが、もっちりした食感で濃厚な甘みがあり、それがなぜ岐阜の地で作られているのか興味を持ったのです。

このバナナを栽培していたのは社会福祉法人清穂会^{せいすいかい}で、障害者の雇用創出に一役買っていることがわかりました。清穂会では働く人たちを「キャスト」と呼び、ディズニーランドのように仕事を通して輝く人生を歩んでほしいと願い、それぞれのスキルに応じた仕事を提供しています。

3年前には農業分野にも進出し、8棟の専用農場で約500本のバナナの株を栽培。凍結解凍覚醒法で育てた無農薬のバナナは、皮ごと食べられ、千代菊とのパートナーシップによりリキュールも開発されています。こうした事業で、キャストは栽培だけではなく発送や梱包作業にも関わっているそうです。

私がいただいたスイーツも、十六銀行と産学連携関係にある名古屋文理大学でバナナを使ったレシピコンテストが行われ、上位2作を岐阜グランドホテルの総料理長が商品化するという幾重にも人の手が加わったストーリー性のあるものでした。

専用農場を見せていただくと、バナナの株には青々とした葉が茂り、大きな房が垂れ、まるで南国のような雰囲気です。理事長の臼井麻紗杜^{うすい まさと}さんによると、バナナは実を1度収穫すると、葉や茎を破棄することになるそうです。そこで、名古屋市にある東山動物園に、動物たちの餌としてプレゼントしているのだとか。イケメンゴリラのシャバーニがおいしそうに食べている姿はほほえましく、結果的に資源を無駄にしない取り組みにつながっています。

さらには、乾燥させたバナナの茎を使ってバナナペーパーを作り、名刺、レターセット、うちわなどに再利用しています。バナナの乾燥した茎約30キロから A4サイズで計1万3千枚が作られたそうです。ここでも、岐阜県内の丸重製紙企業組合との共同開発というコラボレーションが生まれています。

国連で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向けた取り組みが、企業や団体、NPO、個人によって行われていますが、様々なパートナーが手を結びチャレンジしていることに感動を覚えました。

今後、ますます環境にやさしく、誰もが生きがいを持って働くことのできる社会が求められることでしょう。「どれも試行錯誤の末に生まれたものですが、これからも発展しながら続いていくネバーエンディングストーリーです。」と話す臼井理事長。SDGsというと壮大な目標のようにも思えますが、私たちにできることは沢山あると気づかされました。